

重層化する社会的記憶

—9月30日事件後のインドネシア地方社会についてのある『覚書』の考察—

山口 裕子

1. 9月30日事件と「1969年ブトン事件」

インドネシアの首都ジャカルタで1965年10月1日未明に発生した「9月30日事件（通称9・30事件）」は、スカルノ初代大統領（在任1945年-1967年）の失脚を決定づけたクーデター未遂である。事件を收拾したとされるスハルト陸軍少将が第二代大統領に就任すると（在任1968年-1998年）、インドネシアは親共路線から反共へと大きく舵を切り、日本を含む西側諸国から資本や援助を積極的に導入する開発独裁体制を成立させていった。その意味で、9・30事件は独立後のインドネシア史上最大の分水嶺となった事件である。事件の直後から、首謀者とされたインドネシア共産党(Partai Komunis Indonesia、以下PKIと略記) 党員とそのシンパを一掃する名目で、全国で大量の逮捕、拷問、殺戮が発生した。この集団的暴力は1966年ごろまで続いたとされ、犠牲者の数は、陸軍情報当局によると45～50万人、事件へのインドネシア国軍の関与をいち早く指摘したコーネル大学のベネディクト・アンダーソンらによると50～100万人に上るという[Anderson & McVey 1971]。スハルト長期政権期をとおして、事件はPKIの所業に帰す見解を公式のものとして「G30S/PKI (PKIによる9月30日事件)」と表記され、それ以外の見解や、事件後の集団的暴力について公的に語り探求することは重大なタブーであった。

1998年にスハルト政権が崩壊して、民主化とともに言論・出版の自由が相応に保障されるようになって以降は、インドネシア内外で事件の真相が探求され、多数の成果が公開されてきている[ローサ/ラティ 2009: 25, 30]¹。9・30事件はもはや「公然の秘密」ではなくなった。だが目下のところ、それらの探求を通して事件の実相や背景について一つの定説へと収斂していくわけではなく、部分的に重複する「社会的記憶」が上書きされながら複数生み出される、いわば重層化する状況にある。

私は2010年代前半頃から、インドネシア東部の東南スラウェシ州を対象に、9月30日事件後の状況と事件の今日的意味について関係者に聞き取りをしてきた。そこからは、この地域に「赤狩り」の波が到達したのは、州都クンダリを中心とする半島部で1965年末ごろ以降、島嶼部のブトン島

¹ 9月30日事件については研究書のみならず映像作品も製作されている。中でも、加害者と被害者がそれぞれに過去の暴力に向き合う姿を活写したJ. オッペンハイマー監督によるドキュメンタリー映画『アクト・オブ・キリング』(2012年)、『ルック・オブ・サイレンス』(2014年)は、国際的にも注目され高い評価を得た。これらのレビューに基づく事件と大量虐殺の概要については[山口 2017: 28-33; 2021]も参照されたい。

を中心とする地域ではやや遅い 1969 年ごろだったことが分かってきている。特に後者のブトン島においては、ブトン人県知事のムハマド・カシム (Muhamad Kasim、在任 1964 年 -1969 年) を始めとして、ブトン地域の発展に寄与した地元の政治家や知識人らが、PKI 活動への関与を理由に多数逮捕投獄された。ある者は勾留中に落命し、生き延びた者も解放後は「身辺が汚い」、すなわち「PKI に関与した」というレッテルを貼られて社会的差別を受け、島外への退避を余儀なくされた者も多い。一連の出来事は、地元ではしばしば「69 年ブトン事件 (Kasus Buton 69、以下適宜「69 年事件」と略記)」の名で呼ばれ、民主化草創期の 2000 年代初頭にこの地で隆盛した文芸運動では、ブトンの歴史や文化慣習を紹介する文芸雑誌で特集が組まれて顛末がとりあげられた他 [山口 2017: 33-34]、手稿を含む複数の著作物が編まれた。そこでは、69 年ブトン事件で政治囚となった人々の語りには、細部や強調点に多様性が見られる一方で、逮捕の理由を一様に「G30S/PKI への関与」と「ブトン社会は PKI の拠点 (Basis PKI)」という嫌疑に帰す点が共通するなど、一程度定式化された社会的記憶が形成されつつある [山口 2017: 34]。

このように部分的に重層化しながら生成する社会的記憶を構成する言説の一つが、本稿で考察する『1969 年軍事作戦についてのあるジャーナリストの覚書:ブトン「共産党の拠点」』である (以下『覚書』と略記)²。これは私家版の著作物で、著者の L.M. サレ・ハナン (Saleh Hanan) の所属は「ブトン、ハルオレオ大学学生議会人権擁護プログラム」とされる。人権擁護プログラムとは、当時地元の国立ハルオレオ大学の学生で活動家だったサレ・ハナンを代表として、民主化の開始を受けて 9 月 30 日事件の探求が隆盛する中で組織された団体のようである³。全文がインドネシア語で記され、緒言とあとがきを含めて全 44 頁からなり、執筆時期については 2000 年 6 月の日付が付されている。内容は 69 年ブトン事件の概要と、カシム県知事の履歴と業績、人物像についての妻の証言、そして当時政治囚として逮捕勾留された人々の証言などから構成されている。私がこの冊子を入手したのは、このテーマでの調査に着手後しばらくした 2010 年代中頃である。69 年ブトン事件で逮捕勾留経験のある何人かのインフォーマントが、この冊子のコピーを所持しており、聞き取りの途中で自身の記憶のあいまいな部分を確認したり補完するために参照することがあった。さらに「事件についてはここに書いてあるから」と、私に複写を促すこともあり入手に至ったのだ。他にも事件に関する同種の著作物は複数存在しており、インフォーマントがそれらを参照する場面も見られた⁴。つまり 9 月 30 日事件後のブトン社会の人々の「経験の語り」とは、部分的には彼らの語りに基づき作成された資料をさらに人々自身が参照しつつ上書きされる状況にあったといえる。本稿で

² 原題は *Catatan Jurnalis operasi Militer 1969 : Buton "Basis PKI". Program advokasi ham kabinet mahasiswa Universitas Haluoleo* である。

³ 著者のサレ・ハナンがジャーナリストを自称している意図については不詳である。

⁴ 例えば、逮捕勾留の経験者の証言を集めた *Penyaksian Tragedi Buton 1969* と題する資料が存在する。刊行年は定かではないが、掲載された証言の日付が 1999 年 9 月から 2000 年 4 月ごろまでであることから 2000 年以降と見られる。

は、中でも事件に関する最初期の著作である『覚書』を検討する。それにより、経験の記憶が語られ、上書きされながら「69年ブトン事件」をめぐる社会的記憶が生成する様態を解きほぐす端緒を開きたい。

地図1 インドネシア共和国



地図2 東南スラウェシ地域



2. 東南スラウェシ地域と1969年ブトン事件の概要

『覚書』の検討に先立ち、ブトン島を含む東南スラウェシ地域の社会歴史的背景を概観する。東南スラウェシ州は1964年に成立した、州都クダリが位置するスラウェシ島の東南半島部と、ブトン島を中心とする島嶼部からなる、天然資源や産業に相対的に乏しい、インドネシアの政治経済的に周辺的な州である（地図1、2参照）。現在州人口は約270万人（2019年）を擁す。多民族多

言語的人口構成ながら、宗教的にはムスリムが圧倒的多数派を占めるこの州は、宗教や資源管理、国境をめぐる国家レベルの係争地になったことはなく、中央政府からの相対的な不干渉によって特徴づけられる。島嶼部のブトン社会はブトン島（人口約 50 万人）を中心にブトン系諸語をもちいるブトン人から構成される。歴史的には、ブトン島南西部の港市パウパウを中心に 14 世紀に起こったブトン王国が 16 世紀中ごろにイスラームを受け入れスルタン国になり、海上交通の要衝として東南スラウェシ地域での繁栄をみた。16-17 世紀にかけてブトン・スルタン国は、香料を産出した東方のマルク地域や、西方の港市マカッサルを中心とする南スラウェシ地域の諸王国と競合し、時にオランダ東インド会社と与して独立を維持した。

この様な経緯から東南スラウェシ地域では、政治経済的にも文化的にも長く中心的な位置づけにあったのは半島部に対して島嶼部のブトン社会であった。ところが共和国独立後の 1960 年にブトン・スルタン国が廃止になり、1964 年に東南スラウェシ州が成立して、中央政府の意向で州都が半島部のクンダリ市に制定されると、地元のトラキ人が州を代表する民族に定位された。それを一つの契機に、ブトン社会は政治的にも文化的にも州内の周縁部に位置付けられることになった。今日ブトン人が振り返るブトン史は、概して過去の王国・スルタン国時代の繁栄と周囲の諸民族との競合における周辺化の物語である [山口 2011]。その周辺性を決定づけた最も近年の出来事として現地でも認識されているのが 69 年ブトン事件である。

以上の概況を踏まえて、ここからは『覚書』を検討する。同書の所々には、著者のサレ・ハナンの私情の吐露や、誌的な表現が見られ、勢いのある筆致からはそれを書き記すことへの使命感が感じられる。以下ではそのようなテキストの雰囲気や極力温存しつつ素訳し、その部分をゴシック体で記すことでそれ以外の明朝体の本文とは区別する。また、人物が比較的容易に特定できる公人、たとえば県知事レベル以上の政治家、大佐級以上の将校などについては原則として実名を、それ以外はイニシャルまたは仮名で表記する⁵。

「将軍の血も赤かった」

『覚書』の冒頭は、「将軍の血も赤かった (Darah itu Merah Jenderal)」と題する節から始まる。スハルト政権崩壊と同年の 1998 年 11 月にジャカルタで起こった、ある大学生が運転する車が国軍兵士の行進に突っ込み 9 人の兵士が負傷した事件に言及されている⁶。事件は兵士が学生によって

⁵ 印刷状態が悪く判読できない部分については省略または (・) と記す。

⁶ 冒頭には、当時のハルオレオ大学学長 H. M. ハムドゥ教授による緒言が寄せられている。そこでは、同大学の学生がこのような書物を著す水準に達したことへの賛辞や、多くの歴史を「正す (luruskan)」する必要があること、そして 1969 年の悲劇から学ぶ必要があることなどが記されている。特に「歴史を正す」は、厳しい言論統制が敷かれたスハルト期への反動から、ポスト・スハルトの改革期にアカデミズムやマスメディアで盛んに主張されたスローガンである。

負傷した初めてのケースであることに触れることで、反対に32年間に及んだスハルトの新秩序体制期にアチェや東ティモールをはじめとする各地で、兵士や警察によって市民に無数の犠牲者が出たことを喚起している [Hanan 2000: 1-2]。これらの民衆の虐殺と同様の暴力が、1969年にブトンでも起こっていたとして、『覚書』では69年ブトン事件の概説が次のように始まる。

事の発端は、1965年にジャカルタのタンジュン・プリオク港発マルク行き軍艦ドンブ号がブトン島南端のサンポラワ湾に寄港した際に、PKI 党員によって武器が投下されたことにある。当時のサンポラワ郡長のラ・オデ Alkym は、武器が PKI 党員の Hrddn の手に渡り、地方政府の要人に配られたと報告した。武器を受け取った一人が、のちにブトン県知事となる Drs. ムハマド・カシムだったとされた。この報告に基づき、調査のための「ブトン県パンチャ・トゥンガル・チーム (Team Panca Tunggal Kabupaten Buton)」が結成され、サンポラワ郡に二度に亘って調査隊が送られた。だが Alkym 郡長の報告を裏付ける証拠はなかった [Hanan 2000: 2]。

にもかかわらず、この事件は4年後の1969年に突如として蒸し返された。PKI からの武器の受け取りや党活動への関与の嫌疑で、3月21日にカシム県知事と40名あまりの地方政府関係者とブトン人の国軍関係者が、第1413ブトン軍小分区と第143クングリ軍分区によって令状なく逮捕されたのだ。同時に市民の住宅が家宅捜索され、家財の強奪も起こった。被害者たちは、その行いがいかに非人道的であったかを証言している。罪状を認めさせるため、人々は裸にされ、殴られ、体に電極をつけられ、あらゆる拷問をうけた。被害者の一人の、元マワサンカ郡長 Nz は、検事の Sb 率いる調査官に交代で拷問された。足の親指に木の脚を乗せ、上から何人かで乗ってつぶすというもので、Sb 検事は拷問を4日4晩続け、被害者が衰弱したところで罪状を認めさせた [ibid.2-3]⁷。

南・東南スラウェシ地方治安秩序回復作戦部隊 (Komando Operasi Pemulihan Keamanan dan Ketertiban、略称: Pangkoptibda Sulselra) による1979年10月23日付けの調査にも、Nz 郡長は拷問に耐えかねて自白したとの証言が残されている。他にも同様の経験をした犠牲者が複数いた [ibid.3-4]⁸。軍側は、証拠不在にもかかわらず、民衆抵抗組織をつくるために武器を受け取ったと断定したのだ。その証拠は、カシム県知事の公邸から何丁かの武器が発見されたというものだった。しかし(実のところ)武器はブトン県警察署のもので、地方治安取締官 (pagar praja⁹) 用に借用したものだ。のみならずカシム県知事は PKI に付属する東南スラウェシ民衆

⁷ ここでは Nz が5丁の武器を受け取り、うち3丁と2丁をそれぞれ地方警察官などに譲渡したという罪状にサインしたことが、被害者、加害者ともに実名で記されている [Hanan 2000: 3]。

⁸ 彼らの証言はこの後第7節で紹介されている。

⁹ 地方政府下で地域の治安取り締まりに当たった、地方治安維持取締官 (pamong praja) の後身。

抵抗部隊 (Komandan Perlawanan Rakyat Sulawesi Tenggara) への参画の罪を問われた。第 14 軍管区が編纂した『第 14 軍管区ハサヌディンの闘争の歴史的データと事実』の 9 ページには、「1969 年 3 月には、バウバウで 35 人の役人を成功裏に逮捕した。その中には、東南スラウェシ民衆抵抗部隊として直接 9・30 事件 (G30S/PKI) に関与したブトン地方政府も含まれていた」とある [ibid.4]。

1969 年 4 月には、ウジュンパンダン (南スラウェシの現マカッサル市の旧称) から調査チームが到着した。Hd Rhmt 警察中佐や、Bsn 海軍少佐らが囚人たちの取り調べを行ったが、証拠は検出されなかった。1969 年 (・) 月中旬、第 14 軍管区ハサヌディンがバウバウに到着して再調査を行った。この 2 度目の調査こそが、PKI による武器投下という嫌疑が不十分であったことを決定づけている [Hanan 2000: 5]。1969 年 12 月 25 日、第 1413 ブトン軍小分区は、小分区長 And Ptr 大尉の署名入りの証書の中で、武器投下の嫌疑が不十分であることを認めた。残念ながら (sayangnya) この証書は、第 14 軍管区の Jmldn Efnd 大佐らによって「dingin (冷たい、冷静な)」と判断された¹⁰[ibid.5]。

結果として PKI からの武器投下の罪状で逮捕された 45 人中 38 人は正式に解放された。カシム県知事を含む残りの者は、9・30 事件への関与の嫌疑にすぎ替えられて引き続き勾留された。彼らは何年にも亘って身柄を拘束され、謂れのないさまざまな苦難に直面した。1969 年 3 月の集団逮捕の犠牲者の一人の Moh. ザイディは、カシム県知事は PKI ではく、ブトン地方の治安維持能力の欠如という理由で彼を更迭しようとする軍のプロパガンダを妨害したという (不当な) 廉で逮捕されたと証言している。ザイディは当時ウジュンパンダンの第 7 スラウェシ地方郵政局整備創設部門長 (kepala bidang perlengkapan dan pembangunan kantor Daerah Pos dan Giro VII Sulawesi) で、彼こそが、1965 年 10 月 13 日に南スラウェシで PKI 中央労働組合の郵政労働連合 (Serikat Buruh Postel/SOBSI/PKI) を解散した人物だったにもかかわらず (PKI との関与の嫌疑で逮捕勾留された)。以後、親族も「身辺が汚い」として、窮状に陥った [ibid.5]。

3. 赤い線で印づけられたブトン

続く「赤い線で印づけられたブトン (Buton Di bawah Garis Merah)」と題する節では、複数の逮捕経験者の証言に基づき、当時ブトン社会にかけられた「PKI の拠点としてのブトン (Buton basis PKI)」という嫌疑の成否が検証されている。節末には、1969 年当時逮捕、勾留された政治囚のリストが掲載されている。前半部分の内容は以下のとおりである。なお、後半部分はプライバシー保

¹⁰ 「dingin」を「冷静な (判断)」と解釈するならば、軍側からの嫌疑を不十分とする証書の正当性を当の軍管区側が認めたことに対して、なぜここで筆者のハナンが「残念 (sayang)」と述べているのかは不明である。現にこれに続く部分では、この証書によって 38 名が解放されている。

護の観点からここでは検討を控える。

ブトンはアスファルト（の原産地）で有名かもしれない。かつてブトンはスルタン国として繁栄した時代があったが、新秩序（スハルト体制期）の歴史は「勝者の歴史」であり、「公式」な歴史ではブトン・スルタン国のことはあまり知られていない。ブトン人にとって今世紀最大の出来事は「1969年ブトン事件」である。ブトンはPKIの拠点として赤い線を引かれた。新秩序時代にすぐ替えられた歴史は、勝者の歴史であり、ブトンはその意味で新秩序の敗者である [Hanan 2000: 6]。

ブトンは本当に PKI の拠点だったのか？

ブトン県議会議長の Rh Md は、1969年当時大学生だった。1998年10月には「ブトンを PKI の拠点として位置づけたのは第14軍管区ハサヌディンであり、これによってブトン島は赤い血で記しづけられた、つまり PKI に仕立て上げられたのだ」と証言した。この軍管区によるカテゴライズは、Sdrn 少佐率いるブトン軍小分区の報告書によっている。

Rh Md は、(1969年) 当時ブトン大学生協会のメンバーとして在ウジュンパンダンの(第14)軍管区に召喚された際に、Sydmn 准将にブトンで何が起きているのかを尋ねられた。そこでブトン大学生協会は『民衆のコンパス (Pedoman Rakyat)』紙の記者 Pt Hrd をブトンに派遣し、協会からは Ms Aw が同行した。その時の報告書は検閲にひっかからないよう魚の干物の間に隠して送られた。そこからは、PKI の嫌疑をかけられ集団逮捕された当時のブトンの状況を知ることができる [Hanan 2000: 7]。

ブトンでの事件(集団逮捕)について、ブトン大学生協会もウジュンパンダンにおいてある対話を実施している。参加者は南スラウェシ記者協会会長 Smsdn DL、南・東南スラウェシ地方警察長 Jn Anwr、中央記者協会会長 Rshn Anwr であった。この対話で中央記者協会会長の Rshn は、ブトン事件は完全な下種上げだと結論付けている。ブトン社会に PKI はおらず、Sdrn 少佐とその一味が優秀なブトン人青年を一掃し、カシム県知事をひきずり落とそうとしていたと述べたのだ [ibid.7]。

カシム県知事が(獄中で)死去した後、軍人の Z. アリフィン・スギアントがブトン県知事に就任した。民衆がやむなく軍管区内部出身のアリフィン・スギアントに望んだのは、ハサヌディン軍管区による「PKIの拠点ブトン」の汚名をそそぐことだった。

ブトン人は拷問され、PKI 党員であるとの(虚偽の)自白を強いられた [ibid. 8]。1969年2月4日には、ブトン軍小分区のラ・オデ Sbr がサンポラワ郡にやってきて、村人に役場で登録(書類にサイン)をするよう命じた。さもなくば PKI と見なされるぞと脅したのだ。人々は村役場で次々にサインをした。さらに町区軍管区のラ Hj は、民衆に命じて軍に対して4メートルのチーク

材を1人当たり5本献納させた。この命令に応じた者もPKIの烙印を押された。(ブトン島東部の)ワンギ・ワンギ島でも、市民や教員などが登録を命じられ、そのうち教員、公務員、要人らがPKI黨員にされた。酷いことだ [ibid.]¹¹。

様々な段階で情報操作があった [ibid.8-9]。第一に、軍艦ドンブ号から荷下ろしされた武器は、500丁から60丁に変更され、それがPKI黨員のHrddnからカシム県知事や他の官僚や軍/警察関係者に分配された、とされた。第二に、1969年に一斉逮捕されたのは、カシム県知事の他に39人(のエリート)と5人の軍人や警察官とされる。彼らは村のはずれに連行され自宅は家宅搜索をうけた。第三に、カシム県知事は勾留中の1969年8月8日に殺された。他の政治囚は何年か後に解放されたが、PKIのBグループまたはC1グループとしてカテゴリー化された¹²。

4. スルタン・ブトンの証言

本節では、ブトン・スルタン国最後の第38代スルタン、ラ・オデ・ファリヒ(1889年生-1960年没)の長子のラ・オデ・マナルファ(1919年生-2002年没)の証言が「スルタン・ブトン」のそれとして記載されている [Hanan 2000: 13]。インタビューは1998年10月に行われたという。1969年当時、マナルファは東南スラウェシ州議会議長を務めていた。当時カシム県知事と(ブトン地方軍小分区)のSdrn少佐が対立しており、自身がカシムに協力できなかったことを(インタビュー当時)遺憾だった語っている。インタビューでマナルファは、当初獄中死したカシムについて「可哀そうに」と繰り返し多くを語らなかつたという。以下はインタビューでのマナルファの証言である [ibid.]。

マナルファ: いつも彼(カシム県知事)は不満を言っていた。曰く「マナルファさん、Sdrnがいます。協力してください。マナルファさんがいなければ私はどうすればいいのでしょうか?」私は答えた「準備しなさい。あなたは県知事でしょう、どのような状況でも準備しなさい」と [ibid.14-15]。逮捕劇は続き、やがてカシムも逮捕された。私たちは誰が巻き込まれたか知らない。それにブトンがPKIの拠点ということにされた……。確かに、生粋のPKI黨員はいた。(たとえば)Ar。彼はまだ生きている。あとは忘れたが、2人か3人中国に行った者もいた。

¹¹ このように『覚書』では、所々で筆者のサレ・ハナンの私情が吐露されている。

¹² 『覚書』のpp.10-12には1969年の被害者および加害者のリストが実名で掲載されている。1969年に一斉逮捕された文民38人は、「ラ・オデ」と「ラ」というそれぞれブトン人男性王族と貴族の称号がついていることからすべて男性だったことが分かる。職位は元県知事、郡長やその補佐、各省庁の地方事務所長といった要職者、そして地元の中や高校の校長や教員など知識人からなる。彼らは一定期間の勾留のち解放された。一方その後もG30S/PKIの嫌疑で勾留され続けた7名としては、カシム県知事、マワサンカ郡長ラ・Nzの他に、地方の軍や警察の尉官級の士官および補佐官らが挙げられている。さらにブトン人に対して直接PKI黨員の烙印を押したとされる人物として、ブトン地方軍小分区の佐官級および尉官級の将校や士官、さらにスラウェシ軍管区の佐官級将校、東南スラウェシの地方調査チーム(Teperda)長ら7名も列挙されている [Hanan: 10-12]。逮捕された文民には私がこれまでインタビューをした人物も複数含まれる。

—ハナン: Jfr ですか？

マナルファ: そう、Jfr。彼らは生粋の党员だ。訓練された。それ以外はわからない、わからない、わからない。一般人も PKI なのかどうなのかわからなかった。彼のことは知らない。ああ、知らない。ただ聞いたところでは、物品を受け取った時に名前が付いていたという。受け取ったら逮捕され、電極で拷問され、殴られ、あらゆることをされた。カシムも独房に収監された。ある司令官が私に語ったことがある。「あの方(カシム)に会ったが、あの方は本当に巻き込まれた(だけだ)と思っている」。だから私はカシムを気の毒に思う。

だが聞くところでは、サンボラワで武器を忍び込ませた輩がいる。しかしああ、可哀そうに。「ワラカ・ワラカ」が¹³。逮捕までされて、ああ。役人たちが・・・可哀そうに。恐ろしい。私は一人やってきて「(慣習家屋) カマリ」に人員を集めた。何千人もいた。「なぜお前たちはそうなんだ。なぜ教えてくれなかったんだ」私は泣きながら言った。

「私は知っている。ブトンには PKI なんてものはいない。なぜお前たちはそうなのだ。なぜお前たちは誰かが PKI になったと知った時に私に教えてくれなかったのだ？」 [ibid. 14-15]

ああ、私は涙ながらに何千人もの民衆に語った。すると私の背後からこう言う者がいた。

「ええ、マナルファさん、もしマナルファさんに知らせていたなら、この事件は起こらなかったでしょうに。」

そう、くい止めるものはなく、ついにウジュンパンダンから司令官が来た。面会があった後で逮捕劇があった。ある者はクンダリへ連行され、他の者はどこかへ。その時、その後全て終わってから、カシム氏は亡くなりアリフィンが(県知事に)取って代った。しかしアリフィン・スギアントは特命によりブトンの状況を視察しにウジュンパンダンからやって来た。なぜあのように混乱しているのかと。私は目撃したから知っているが、私はクンダリ空港に行った。「ええ、お前はここで何をしている」私はアリフィンを知っている。かつての同級生だったのだ。「何している？」「私はブトンとクンダリがどんな状況なのか見たいのだ」アリフィンは答えた。「ああ、そうかい？」そして彼は消えた。それからどうなったかは知らない。

たぶんブトンに行ったのだろう。当時スパイ (intelijen) でウジュンパンダンから来たのかは分からない。彼は突然ブトンに現れた。アリフィン・スギアントが県知事になった時はとんでもなかった。あたかもブトンを救いに来たかのようなようだった。まだブトンは「PKI の拠点だ、拠点だ」と言われていたから。・・・ああ、困難だった。ブトンは生きる気力をなくしたようだった。恐ろしい。どこもかしこも恐怖だった [ibid. 16]。政府が PKI というだけで恐ろしかった。ああ、PKI。アリフィン県知事でさえ「どうやって(ブトン地域を)開発しようか」と、まるでブトン

¹³ ワラカ (Walaka) とはブトン社会の貴族層のこと。当時王族出身者が地方政府の要職を占める中で、ムハマド・カシムはワラカ層出身者初の県知事だった。

人のことは他人事のような物言いだった。ブトン語で「生きる」を知ってるかい？「生きる」。ああ、“hodi-hodi”だ。(インドネシア語では)スマンガット(生气)。自身を知るため、高めるために、より広く物事を考えるために一生懸命になるということだ。だが“hodi-hodi”を失ってしまった。自信を喪失したのだ。(中略)ブトンでは、商売をするのに、ジャワ、ウジュンパンダン、マルク、ヌサ・トゥンガラなどどこでも行っただろう？可哀そうに、小商人は、商品(海藻など)を持っていくだろう？港に着くと人々は言うのだ「…PKI！」と。ブトン人というだけで「PKI！」と。

ああ、商品がひっくり返され海に捨てられた。可哀そうに PKI, PKI。小市民は力を失った。どこでもブトン人は PKI, PKI, PKI と。悲惨だった。

アリフィンもまた大変だった。私は当時、州議会議長だった。エディ・サバラ州知事の時代だ。ここ¹⁴はもう平和だったが、人々はどうだっただろうか？アリフィンは Al Fariqi というブトン兵の銅像を建立した。Al Firiqi は世界的に有名な兵士だ。勇敢なアラブ人の同胞で、ブトンの兵士だ。多くの人が、それが(16世紀の初代スルタン)ムルフムだとは思わないだろう。おお諸君、ブトン人ですら自分たちの社会に誰がいるか分かっていない。この銅像は人々に勇気を与えるものだ [ibid. 17]。

私たちは何百年も前からブトン島中の村々に要塞を築いてきた。それは民衆の務めだった。それゆえにブトンは占領されたことがなかった。オランダ、日本、英国、スペインによってもだ。ところがこの広大なインドネシアではどうだろう。1945年憲法によって(ブトンはインドネシアに)包摂された。自信さえあれば、ブトン人が大統領にだってなれるのに。ハビビは大統領になった。(スラウェシ島の)パレ・パレ人だ。ブトン人が大統領になれないことがあるか？ブトンはいまだかつて占領されたことはない。私はスルタンの子どもとして言おう。占領されたくない。決して。そして占領されたことはない。私たちは自由だ。インドネシアはわれわれを占領していない。私たちは対等だ。われわれも州知事なれる。大統領になれる。このインドネシアで。このブトンは十分偉大なのだ。

アリフィンが県知事に就任した時、私も臨席していた。キアイ・ハジ Asr が演説をした。当時のブトンの状況を鑑みて、しまいには涙ながらに。私たちはすべてを受け入れた [ibid.18]。アリフィンはあたかも救世主のようだった。PKI とみなされた可哀そうな民衆の救世主。だから受け入れられた。私がクンダリからやってきた時には、まだブトンは困難の中にあった。まだ平和ではなかった。まだ心に穴が開いていた。トラウマなのだ [ibid. 18]。

1969年のブトンでは、単なる殺人ではなく、ブトンという一つの民族を壊滅させることが起

¹⁴ 「ここ」が州都クンダリを指すのかブトン社会を指すのかは不詳である。

こった。慣習的シンボルや民族の礼拝所、慣習組織は軍によって破壊された。たとえばカレドゥパ島の慣習組織（sara）は解消させられ、慣習的な道具やイマーム（導師）の杖は焼き払われた。ラクド地域のモスクでも同様のことが起こった。多くのブトン人は他所へ逃れ、PKIの烙印を押されることを恐れてブトン人であることを明かすのを嫌がった。しまいには、ブトンはスルタン国の歴史への誇りがあったはずだが、1969年の没落の歴史ばかりが想起されるようになった。だからこそ若い世代は歴史から学ばねばならない。

ブトンは植民地化されたことはない。しかし1969年の出来事は何を象徴しているといえるだろうか。インドネシア共和国軍は植民者だったのか？帝国主義的だったのではなからうか？

5. カシムは殺害されたのか、自死だったのか？

本節では、カシム県知事の死と人物像に接近している。軍による自死という発表の不可解な点や、遺族は遺体との対面も許されなかったこと、さらにさかのぼってカシムの共産党入党自体が捏造であったことなどが、複数の関係者の証言に基づき記述されている。

ブトン人に尋ねれば、ムハンマド・カシムは絞首される前に殺害されたのだと答えるだろう。遺族は遺体に対面することもケアすることも叶わなかった。しまいには遺体は傷み、首を絞められた跡もなかった。ブトン軍小分区から刑務所に連れ戻された時にはカシムはすでに亡くなっていた。他の囚人に目撃されないよう全ての灯が消された。ということは、カシムはブトン軍小分区内で殺されたのだ [Hanan 2000: 19]。

インドネシア国軍の見解では、カシムの死因は首吊りによる自死だという。ブトン人はとりあわないが。1969年8月8日 Sdrn 少佐とブトン軍事地区司令官は突如としてカシムが首吊り自殺をしたと公表した。カシムの妻の Ann カシム夫人は、夫について短く「死亡の公表があった時、私や親族は遺体の引き取りも許されなかった」と眼に涙をためながら語り、次のように続けている。

私の母が、這いつくばって役人の股下を抜けて潜入すると、夫（カシム）の体はもう痛めつけられていた。胸には穴が開き、全身は腫れ上がり傷だらけだった。私は尋ねた。何が自殺だというのですか、と。主人の遺体からは舌は出ておらず、目も見開いてはいなかった。ましてや家を取り囲まれた時は、おお……。 (中略) 捕らえられた時も面会は許されず、薬の差し入れも叶わず、差し入れた食料は監守によってひっくり返されて検査された。亡くなった後も会えなかった。墓前に参る時も役人に監視された [ibid.19-20]。

証言者の一人で元囚人のラ Nggs は、カシムと同じ房に収監されていた。「カシムは深夜軍小分

区に取り調べのため連行された。カシムが房に戻された時には、我々は消灯し、見ないように命じられた。」別の証言によると、カシムが軍小分区から戻された時は、上下逆さに担がれていた。

国营アスファルト会社の Smd 医師は、1978 年 2 月 8 日にジャカルタで（・）を介してカシムの検死をした。その遺体がカシムのものであることを認めたが、状態については説明していない。何かが秘匿されている。親族によると、亡くなる 10 日前、彼は食事も水も与えられていなかったという。身体は拷問で傷ついていた（後略）。

1969 年 3 月 21 日にカシムは逮捕された。目撃者の一人は Drs. H. Af で、本書の出版時はブトン県議会のメンバーで事件当時は大学生だった。カシムの逮捕の理由としてでっち上げられた罪状は武器を投下したことだったが、証拠はなかった [ibid.21]。

1964 年 4 月には、カシムは PKI 党員宣言をさせられたという。大規模地域委員会 (Comite Daerah Besar) 書記の M. Djfr は、PKI 東南スラウェシ大規模地域委員会会長の A. Rhm がカシムの家にいたと証言した。Sydmn S 最高司令官 (panglima birigjen) によると、カシムは PKI に入党したという。M. Djfr 自身はカシムを PKI に入党させていないと反論したが、検査官には取り合ってもらえなかったと述べている。真実は、第 1413 ブトン軍小分区側の言い分のような「1964 年 4 月に PKI に入党させた」という事実はなかったということだ。当時カシムはウジュンパンダで東南スラウェシ州の公務員として勤務しており、PKI に入党した場所とされるブトン県知事公邸には、まだ Abd. ハリム (ブトン県知事) がいた。また、カシムを党員に任命したとされる PKI の M. Djfr は 1963 年 12 月から PKI 東南スラウェシ大規模地域委員会の会議のためにクングリにいた。1964 年 1 月には会議の報告のためジャカルタに行き 2 月にはクングリに戻っているが、1964 年 5 月から 12 月は海外におり、12 月によくバウバウに帰還している [ibid.22]。(ブトン軍小分区によるとカシムの PKI 入党を証言した人物とされる) A. Rhm については、1964 年 2 月ごろにはクングリに異動になり、12 月までは党活動のためジャカルタにいた。つまり 1964 年 4 月にブトン県知事公邸でカシムが PKI に入党することはありえない。当時彼は県知事にさえなっていなかったのだから。カシムと M. Djfr は対面したこともなかったのだ。カシムの死後ブトンは軍に牛耳られた。村の末端にいたるまで (要職は) 軍属によってにぎられた。

つづいて、カシムの履歴について以下のように記されている [ibid. 22-23]。

M. カシムはどのような人物だったのだろうか。

1929 年 6 月 16 日 ブトンに生まれる。

1956 年 12 月 27 日 Ann Djrh (1938 年生まれ) と結婚。

1961 年 11 月 29 日 ガジャ・マダ大学卒業。

1963年5月14日 インドネシア共和国独立闘士 (Veteran Pejuang Kemerdekaan Republik Indonesia) に認定 (退役軍人関連大臣バンバン・アンタディナタによる大臣令 Surat Menteri Urusan Veteran No.102/P/Kpts/MUV/1963 に基づく)。

1964年11月27日 県知事事務所に着任。

1965年9月15日 正式に県知事に就任。

学界での活動は次のとおりである。

1960年 インドネシア共和国退役軍人大学マカッサル校教育学科長就任。

1963年 ハサヌディン大学法学部特任行政部長、同年同大学社会政治学部特任行政部長を歴任。生涯、東南スラウェシの発展のために尽力し、特にプトンの人材開発に力をいれた。

1964年7月24日 東南スラウェシ州知事事務所の公務員職に就任。ラ・オデ・マナルファや他の要人とともに (州都クダリにのちに国立となる) ハルオレオ大学を建学した。さらにラ・オデ・ハディ、ラ・オデ・アブドゥル・ハリム、Drs. ラ・オデ・マナルファ、Drs. Lngklらとともに (プトン島の中心地) バウバウに私立東南スラウェシ大学と教育大学の支部を設立した。1967年には、ウジュンパンダンのハサヌディン大学学長と教育大学学長の決定によりクダリ市のハルオレオ大学とバウバウの東南スラウェシ大学は、それぞれハサヌディン大学とウジュンパンダンの教育大学の支部の位置づけになった。前者の取り決めのために奔走したのがカシム県知事だった。行政執行評議会 (Badan Pemerintahan Harian) のメンバーだった Al Syf 警察中尉助手を使わせてハサヌディン大学学長の N. サイド大佐を迎えに行かせている。また、1964年に県知事になると同時に、カシムはバウバウ国立第二中学校建設のために、親族の土地を提供している [ibid. 23-24]。

イスラーム教育の分野でもカシムは私立イスラーム研究所予備校 (Sekolah Persiapan Institute Agama Islam) をバウバウに建設した。費用はプトン県議会の決定により市民から徴収された。このようにカシムは第一に公的教育によって人材開発を進めることを展望した。この姿勢は1967年にカシムがハサヌディン大学を訪れた際に、学長の N. サイド大佐によって称賛されている。

1969年8月8日、勾留中にカシムが亡くなると、即座に Z. アリフィン・スギアント少佐 (ママ) が県知事に就任した。スギアント県知事は、1970年1月にバウバウに国立イスラーム大学アラウディン校を開学した。教育大学東南スラウェシ校用の予算を国立イスラーム大学アラウディン校運営に充てることになった。こうして2つの高等教育機関は閉校に追い込まれた。カシムの死とともに彼の功績もプトンの地から葬り去られたのだ。完！

“お母さん、お父さんはどこ？”

本節の最後では、夫として子どもたちの父親としてのカシムの横顔について、Ann カシム夫人による回想によりながら詩的な表現を交えて記されている。

そこにはかしまった表情の写真があるだけだ。朝の挨拶をしてミルクカップを配る笑顔はもうない。「お父さんの自慢の子どもたちよ、お休み」といって子どもたちを愛撫し寝かしつける人はもういない。一日、一週間、一月、一年と耐え忍ぶのは母親のみ [ibid.24-25]。

子どもたちに「お父さんはどこ？」と尋ねられるたびに、妻の Ann カシムは「ジャカルタの学校に通っているんだよ」と答えていた。子どもたちは父親が随分前に殺害されたことは知らされていなかった。カシム夫人はジャカルタに行くことがあると、子どもたちに土産を持ち帰り、「お父さんからだよ」と渡していた。子どもたちは幸福だった。子どもの誕生日や断食明け大祭が来ると、カシム夫人はプレゼントの包みを用意して、切手を貼ることも忘れず、「ほら、お父さんからよ！」と子供たちに手渡した。ずっとそのようなことが続いた。

子どもたちは成長すると父親に会いたい気持ちをいよいよ抑えられなくなった。学校が休みの日はジャカルタに会いに行くと言い出し母親の Ann をたいそう驚かせた。Ann はジャカルタの兄弟に連絡して、夫人と子どもたちがジャカルタに到着して父親の所在を尋ねたら、外国に行ったと言うよう頼んだ。心が痛むものの、子どもたちの気持ちを落ち着かせることが最優先だった。子どもたちは（真実を）知ってはならなかった。しかし「君たちが恋しい」という電話の一本も父親からはかかってこなかった。子どもたちの不安はつづいた。しかし Ann はブトン島に帰ろうと子どもたちを説得した。子どもたちはなぜ父親が帰らないか尋ねると、Ann は冗談交じりに「お父さんは外国で結婚したんでしょう。でもお母さんはあなたたちと一緒にだからね」と伝えた [ibid.25-26]。

子どもたちの父親への思慕の念はそれほどまでに強かった。だが父親はもうすでにこの世におらず、聞くところでは国家任務を遂行する者たちの血塗られた手によって殺された。インドネシア国軍という名の。

6. はしがき：ラ・オデ・ハディからムハマド・カシムへ

東南スラウェシ州は南スラウェシ州から分離して 1964 年に独立した一つの州となった。ラ・オデ・ハディが初代州知事である（在任 1965 年 7 月 -1966 年 10 月）¹⁵。彼は文民初の州知事で、ブトン人である。当時、(州の)人的資源、自然資源はともに低開発だった。何もかもが不足しており、地方軍がラ・オデ・ハディの政府を転覆させようとした。ラ・オデ・ハディは不適任との評価が下されて、彼の任期は短命に終わり、第 14 軍管区ハサヌディンのエディ・サバラ大佐が取って代った（在任 1966 年 10 月 -1978 年 6 月）。

ラ・オデ Abbr は、1969 年の事件の犠牲者の一人で、軍が権力を奪取するために働いた陰謀を暴こうとしていた。軍はラ・オデ・ハディ州知事の解任に関わっていた。(だが) 州知事の交代

¹⁵ 通説では初代東南スラウェシ州知事は Wayong（在任 1964 年 4 月 -1965 年 7 月）で、ラ・オデ・ハディは第 2 代目である。

だけではブトンを攻略したことにはならなかった。文民の県知事ムハマド・カシムがいたのだ。ブトンには人材が豊富だったので（軍にとっては）「ブトンを制することは東南スラウェシを制する」ことを意味した [ibid. 27-28]。

最初のステップは、ブトンに不穏な空気を生み出すことだった。1967年にLb大尉がブトン軍小分区参謀長（Kasdim）に着任すると、紛争のでっち上げが始まった。長らく平和だったバウバウの市場は、地元の若者と新参者とのけんか沙汰で混乱した。けしかけたのは、第1413ブトン軍小分区宿舍の若い兵士たちだった。騒乱はいつもたまたまだがブトン人の警察によって收拾された。状況の悪化はLb大尉を激怒させた。警察と兵士の抗争は続き、ついには武器を持ち出し一触即発の事態にまでなった [ibid.27-28]。

しまいにはムハマド・カシム県知事がスケープゴートにされた。軍によってブトンの治安維持能力に欠けると認定されたのだ。ブトン軍小分区長Sdrn少佐、ハルオレオ軍分区長スパルマン大佐と東南スラウェシ地域調査チーム長Rstm Ksm Jy少佐は、カシムへの攻勢を強めた。たとえばSdrn少佐は、バウバウやウジュンパンダンの大学生に対して、ムハマド・カシムがPKIから武器を供与されているといった風評を流して警戒心を煽った。

カシムを追い詰めるプロパガンダが、たとえば金曜礼拝が終わったモスクで行われた。スパルマン大佐はウジュンパンダンの大学生協会（HIPMIB）実行委員の前で、ムハマド・カシムはブトンの治安維持の能力を欠いているので交代を望むと主張している。だが、ブトン地方議会のメンバーはブトン地域の開発におけるカシムの施策を支持した。

上述のように、カシムを陥れる方策が奏功しなかったので、Sdrn少佐らは近道を探ることにした。こうしてムハマド・カシムはPKI党員にされ、逮捕勾留され、拷問され殺害されたのだ。完！

「赤い櫛団」対「11人組」

ブトン全土を恐怖に陥れるために、超ブトン・ナショナリスト集団（ultra nasionalis Buton）の「赤い櫛団」が組織された。それはカシムとともに捕らえられたブトン社会の要人たちからなった。いつもズボンのポケットに印として赤い櫛をいれていたためそう呼ばれた。自分たちの味方かどうかを見分けるためなのだが、髪から虱を櫛削ることに例えられた。赤い櫛団のイデオロギーは超ブトン・ナショナリズム的で、アンチ外来者だった。そのため一般市民からは恐れられ反発を受けた。しかも赤はPKIと同一視されたから一層恐れられた。軍も対抗し彼らを逮捕したというが、本当だろうか [ibid.29]。

二つ目は「11人組」といわれる集団だ。すでにブトンをPKIの拠点として破壊していた軍に妥協し、ブトン人に地域を統治可能な者はいないという声明を出していた。Sdrn少佐は軍がブトンを統治しやすいようブトン人の子弟を根絶やしにしたいと思っていた。一部は、まだ逮捕されてい

ないブトン人子弟を救うために 11 人組が必要だと考えたが、少なくない人々は 11 人組を裏切り者にとらえていた。

両グループは相互に存在を否定した。端的に言えば、両グループともに、ブトン人同士が疑心暗鬼になるよう仕向けた軍によるでっち上げだった [ibid. 30]。

リウ・トンキリ島、集団虐殺の現場

リウ・トンキリはブトン島の西方にある小さな島である。蛇の島としても知られる。ニルワナ海岸の東側の丘から眺めると、白い砂とヤシの木に覆われた静かな島だ。ここでかつて PKI の谷で虐殺があり、墓地があることを多くの人々が知るわけではない。

PKI と認定された者はバウバウから軍によってリウ・トンキリ島に連行された。するとその土地で耕作をしていた別の集団と喧嘩になった。生き残った者は埋葬する穴を掘るよう命令された。自分たちを埋めるための穴を掘ったのだ。そして出来上がると一列に並び、互いに銃撃した。銃撃の後、死んだと思って置き去りにされた者が目撃者となった [Hanan 2000: 31]。

奇妙なのは、軍隊を乗せた船がバウバウに戻ろうとした時に、(上述の生き残った人物が) 船上に現れたことだ。虐殺を実行した司令官は眼を疑った。目撃者を始末する仕事を与えられた手下を司令官自らが撃った。

目撃者は (2000 年) 現在も存命である。彼は当時をしのばせる銃弾の跡が残った帽子を持っている。島での出来事をうやむやにするために、軍はリウ・トンキリ島には蛇が沢山いるという噂を広めた。人々は島へは近づこうとせず、埋葬地がどうなっているか知っている者は少ない。

(件の目撃者の氏名はトラウマになっているためここに書くことはできないし、彼は何も語るうとしなかった [ibid.32]。)

7. 犠牲者の証言

本節では、69 年事件において軍によって逮捕勾留された複数の元政治囚の証言が記載されている。

ラ・オデ Abbkr

Abbkr によると、1969 年ブトン事件は、ブトン人の優秀な子弟を PKI に関与させることで政治から遠ざけるという方法で、(軍が) ブトンを統治するためのでっち上げだった。Abbkr 自身はブトン地域行政執行評議会のメンバーだったので、(軍にとっては) 葬られなくてはいけない「重要人物」だった。(軍は) なぜブトンを統治しようとしたのか? 低開発な時代にあってブトンはすでに商業と教育の中心として先駆的存在だった。ブトンを治めることは東南スラウェシを治めるこ

と同じだった。(AbbkR氏は次のように語った)

私は共産主義者にされた犠牲者の一人だ。理不尽にも私は7カ月間勾留された。ブトン軍小分区長 Sdrn 少佐や、軍小分区スタッフ長の And Pttr や軍小分区の Shb 中尉らはみなブトン軍小分区の人物だった。熾烈な迫害、殺人、略奪が起こった。私の家も略奪された。子どもたちのための装飾品が略奪された。ウジュンパンダンで大学生だった時、私は打倒 PKI のデモに参加したことがある。それなのに PKI の咎を負わされるとはおかしな話だ [Hanan 2000: 33]。

ラ・オデ Abdl Rf

あの出来事は、地方政治と様々な勢力間の利益のために第 1413 ブトン地方軍小分区長 Sdrn 少佐によってでっち上げられたものだった。当時ブトンは東南スラウェシの中でも優れた人材に恵まれていた。ブトンは混乱しており紛争が起きていたというデマが流されて、南スラウェシから調査チームが派遣されるにいたった。調査チームは事の真偽を確かめるためにあえてバウバウ港から離れたボネボネから上陸し、ブトンが平穏であることを確認した。

Sdrn 少佐の情報はかつて Luwuk で混乱を巻き起こした時と同じものだった。私はブトンの高校の校長として、また県知事の諮問役でもあり、県知事に次ぐ殺害のターゲットになっていた。バウバウで逮捕勾留された者は拷問され、PKI 党員であることを認めることを強制された。カシム県知事は勾留中に死亡した。私は彼が首つり自殺したとは信じていない。そうならば舌が出るはずだが、そうではなかった。その奇妙さは遺体を洗浄した友人が語っていた [ibid. 33-34]。

ラ Nz

1969年2月22日、私がマワサンカ郡の郡長だった時だ。バウバウである警察官に呼ばれ調査チームの役所に行き、そこで尋問され捕らえられた。2月23日の昼、Sbyn 検事率いる東南スラウェシ調査チームで取り調べを受けた。嫌疑は G30S/PKI が起こる前の 1964年8月、私がサンポラワ郡の郡長だった時に、義弟の Hrddn とともに、Mzd と La Msh Mn という PKI 党員から 5丁の火器を秘密裏に受け取ったというものだった [ibid.34]。

私は嫌疑を否定した。取り調べ官リーダーの Sbyn 検事は認めさせようとストロームをした。親指を机の脚の下に置き、その上に何人かの取調官が乗った。親指からは大量の血が出て、変形してしまった。だが私は嫌疑を否定し続けた。そのあと4日4晩、人間の域を超えた迫害を受けた。意識がもうろうとした中で、Sbyn 検事は私に嫌疑を認める書類にサインをさせた。

だが 1965年8月の(サンポラワでの)武器受け取りの嫌疑をかけられていた時、サンポラワ郡の郡長はラ・オデ Alkym で、私はブトン地方政府の会計職員だった。1965年8月は地方政府の職員だった Ms Kntj とともにクンダリにおり、東南スラウェシ州政府の役人とブトン地

方政府の財政に関する業務をしていた。1966年2月1日にサンボラワ郡長に就任したのだ。上記の嫌疑で私はバウバウとクダリで囚われの身となり、(クダリ市郊外の)アメロ口の流刑地でG30S/PKIの政治囚として7年間隔離された。続いて取り調べは第14軍管区ハサヌディンチームのLs中尉とWtmn地方警察官によってなされ、私に武器を渡したというMzdとも対峙した。Mzdは取り調べの前に突っ伏して、武器を渡したと認めてしまったことは間違いだったと神と私に許しを請うた。Mzdは喉を震わせ嗚咽していた [ibid.34-35]。

Al Syf

1969年3月、私たち警察中尉助手はクダリにおり、第1期開発五ヶ年計画¹⁶の開始にあたって、全東南スラウェシ郡長の研修に参加していた。3月17日の11時ごろ、私たちはクダリの軍分区会館の研修室にいた。突然クダリの地方調査チーム/軍小分区のメンバーがやってきて私たちは囚われの身となった。警察中尉助手のラ・オデMlwsと警察少尉のAbdl AzsからL.E.種の武器を受け取ってムハマド・カシム県知事に譲渡した嫌疑で夜には取り調べを受けた。私たちは嫌疑を否定し、(武器を譲渡したという)MlwsとAbdl Azsとの面会を求めたが聞き入れられなかった。取り調べ官は汚い言葉でののしり、私たちの髪をつかんでこれがバウバウのプロの警察官だ、と言った。私たちは否定し通したので、拷問され、ストロームされた。力尽きてついには認めざるを得なかった [ibid. 35-36]。

二つ目の嫌疑は、勾留されて10日目ごろに南・東南スラウェシ地方警察のSmd警察少尉が取り調べにやってきて、私たちの名がインドネシア党(PARTINDO)¹⁷の記録に載っていると告げたことだった。逮捕前、私たちはウジュンパンダンの国立教育大学バウバウ分校の学生だった。1965年初頭にはすべての大学生が学生組織に入るよう促された。私と2人の友人の警察准将ラDdとY. Msは、Kmrddn Ptmbng警察中尉に対して軍関係者も学生組織に入れるよう推薦してもらうよう頼んだ。私たちはいくつかの組織に属したほうがいいと提言され、インドネシア党の下部組織のGermindoに入った [ibid. 36]。

ラ Dng

当時ブトン島の離島のカレドゥパ郡の郡長だったラDngは、上記のAl Syfと同じくクダリ市での郡長研修に参加し、同様の武器受け取りの嫌疑で尋問されたと証言している。

¹⁶ 国家開発のために1969年4月から開始された五ヶ年計画のこと。

¹⁷ 1931年から1936年まで存在した政党。オランダ植民地政府による1929年のスカルノら国民党幹部の逮捕を受けて、民族主義者のサルトノが発足させたもの。Al Syfらのこの政党への関与が当時なぜ問題となったのかは不明である。

1969年3月（警察中尉だった）カレドゥパ郡の郡長として、クンダリでの郡長研修に参加していた。1969年3月18日の正午ごろ、私たちと（バタウガ郡長の）ラ・オデ Mhmd Bnt は東南スラウェシ地方調査チームから呼び出され、地方警察のラ・オデ Mlws からバウバウで一丁の L.E. 種の武器を受け取りムハマド・カシム県知事に譲渡したという嫌疑で尋問された。即座に私たちはその嫌疑を否定し、Mlws に問いただすので合わせてほしいと願い出た。取り調べ官側は拒否し、しまいには私たちは電気でストロームされ、部屋にあったあらゆるもので意識がなくなるまで拷問された。私たちは脅されて命と引き換えに嫌疑を認めざるを得なかった。

1969年4月、ウジュンパンダンのチームによって取り調べを受けた。メンバーには Hd Rhmt 警察中佐と Bsn 海軍少佐がいた。私たちは濡れ衣だと主張した。人間の域を超えた拷問を受けた。1969年5月にクンダリ刑務所に移された。1971年8月15日にウジュンパンダンの流刑地にさらに移された。1977年12月20日に、元 PKI 政治囚に分類され解放された [ibid. 37]。

Ab Al Yns

私は1967年、バウバウの第14/301憲兵隊 (Pos POM) に配属された。第1413ブトン軍小分区長の Hj Lb 大尉は賛同していなかったようだ。彼はクンダリにたち、第14/3クンダリ憲兵分遣隊長 (Danden POM) に別のメンバーに変えてもらうよう伝えた。理由は私が地元出身なので、雰囲気になじめないからとのことだった。第14/3クンダリ憲兵師団長は Lb 大尉に対して、第14/HN/地方憲兵隊長 (Ka POMDA) の命令書は変更できないと答えた。だから私はブトンに留まった。1968年末に、ブトン軍小分区ピケットの軍曹 Rstm Ksm Jy 少佐に呼ばれ、ブトン県知事公邸に行った。「もうどれぐらいバウバウで勤務しているのか」と尋ねられた。「一年以上です。」「ここでの居心地はいいか？奥さんはこの人なんだろう？」「はい、私も地元出身です。」(中略) 続いて、Rstm 少佐は次のように言った。「Yns 軍曹、もしこの居心地が悪かったら、司令官に異動させてもらうから言いなさい」この話を聞きながら内心、なぜ2人とも私にバウバウに留まらせたくないのだろうかと思った。ほどなくしてクンダリ憲兵師団長の Shrn 少佐がバウバウにやってきて事務所面で面会した。その時も異動の意思の有無を問われた。曰く「今は憲兵の空きはないが、もしあればそれは神の恵みだ」という。わたしは異動を考えたこともなかったので不可解に思った [ibid. 39]。ほどなくして私は、PKI の抵抗活動用に武器を密輸したという嫌疑をかけられた。

1969年3月24日の正午ごろ、バウバウ刑務所で G30S/PKI の囚人の監守が終わり自宅 (バウバウの第14/301憲兵隊住宅) にいたところで、バウバウ憲兵分遣隊長の D. Spnd 中尉助手に呼ばれた。タスクがあるので、プレマン (ならずもの) のような恰好をするように言われた。

私は刑務所に勤める別の憲兵隊メンバーを呼びに行った。ところが私は騙されたのだ。刑務所に着くや G30S/PKI として捕らえられ鍵を閉められてしまった。1969年3月25日22時にはクングリに移送され、3月26日15時に到着した。そこから直接、地方調査チームの監房に連行され、20時に取り調べが始まった。1965年にラ・オデ Dyn(バウバウの裁判所の職員)にワルルマ(地名)の自宅からバウバウ裁判所のジープで連行された。PKI 党員のラ Ar から L.E 種の 7 丁の武器を受け取ったという嫌疑だった。

その他の取り調べでは、取調官は先述の 7 丁の武器を運んだのはバウバウの保健省職員のラ・オデ Dn で、武器は船で運び、続いて私と保健省職員のラ Msh Mn がソペ・ソペ(小舟)で運んだとされた。クングリでは私たちがその武器をクングリ ZIV/3 憲兵分遣隊長の Hrtn に渡したということにされた。私はそれを否定し嫌疑はでっち上げだと主張した。私はラ Ar との面会を要請したが許可されなかった。それどころか誹謗中傷された。取り調べ官はストロームの箱をとりだしたが私は嫌疑を否定し続けた。取り調べ官は一層憤って殴打と拷問が始まった。私はストロームをされてぐったりした。さらに木片やロタンで何度も殴られた。頭、体、足、腕はあざだらけでぼこぼこになった。私は何度も椅子から転げ落ちた。彼らは私の体に火をつけるぞと脅して灯油をかけ、髪の毛、服、ズボンは濡れ、髪の毛にマッチの火を近づけた。やむを得ず私は彼らの言う嫌疑を認めた。1971年8月15日に私はウジュンパンダンに船で移送され、8月17日に到着し、流刑地のウジュンパンダン第 14/HN 憲兵隊 RTM に収容され、何年も留め置かれた。1977年7月には同じ嫌疑と、私が兵士になる前後で禁止されていた政党や組織での活動について、南・東南スラウェシ調査チームの Hnng 警察少尉と Mnrng 軍警察中尉助手によって再び取り調べられた。私は頑として嫌疑は不当だと主張した。1977年にウジュンパンダン郊外の流刑地モンチョンルウに移され、1978年9月23日に解放された。長い恐怖と苦境の中で再び家族の元に戻ることができたことに私は涙ながらに感謝した。しかし PKI の B グループに分類されて解放されたと知らされた後は、やっと取り戻した幸福が破壊された思いだった [ibid. 40]。

気の毒に…!

8. 著者による証言：逮捕、刑務所、略奪品、殺人

『覚書』の最終章でサレ・ハナンはブトンでの集団的暴力の凄惨さをナチスによるユダヤ人迫害に重ね合わせ、次のように締めくくっている。

1969年のブトンの状況は不確かだ。社会は恐怖で沈黙していた。それについて語ったり理由を尋ねたり反対する者は PKI の烙印を押された。ブトン人は黙って受け入れるか根絶やしにされるかの 2 択しかなかった。ブトン人が何をしたというのか？

あるユダヤの詩人が心痛を一篇の詩に著した。

引き金を引きながら／彼らは指揮官のナイフで線を引きながら記した／彼らは滅亡するに違いない／彼らは滅亡するに違いない／私たちは無念だ／私たちは…

1935年の春にドイツにいた彼は自身のことを詩に書いた。彼が経験したことはナチスがユダヤ人を根絶するために決行した残虐行為だった。ヒトラーの命令下で兵士がやったことは証明済みだ。

ブトンでは、刑務所の入り口に片足を突っ込みながら、人々は口々になぜ自らが逮捕されなければならないのかを問うた。だが本当は、誰の命令でそこに連れてこられたのかは周知のことだった。警察や兵士はブトン人の家々にやってきて銃口を向けた。それだけでなく兵士は家財を略奪し人間性を支配（植民地化）した。命令書も裁判もなく。あったのは刑務所だけだ。捕らえられた者は過ちを犯してはいけなかったのに、兵士と警察による迫害と嘲りは、ブトン人を追い込むための制裁となった [ibid.41-42]。

なぜブトン人は逮捕されねばならなかったのだろうか。再び一篇の詩が、ヒトラーのナチスによってユダヤ人が受けた残虐さの証となる。破壊する対象がなくてはならなかったのだ。別の者が留まるために追放されなくてはいけない者がいた。この事件を学ぶ時、ブトンの人々は、その作戦を実行した者がブトン語を話さず武装していた者であったと証言する。彼らは犠牲祭のように興奮して、際限なく迫害した。

1969年のブトンには私はまだ生まれていない。私がここに書いたよりも彼らはずっと残酷だったと憤る人がいるかもしれないが、この事件について今ここに記すことが、私の使命であると認識している。

サレ・ハナン

9. おわりに：社会的記憶の解きほぐしに向けて

本稿では、民主化草創期のインドネシアの東南スラウェシ地域で、大学生活動家のサレ・ハナンが編纂した『1969年軍事作戦についてのあるジャーナリストの覚書：ブトン「共産党の拠点」』を考察してきた。本書は、ポスト・スハルトの改革期を迎え、ジャカルタの9・30事件について国内外で探求が開始する中で、1969年を一つのピークとするブトン社会での一連の集団的暴力を「69年ブトン事件」と名づけ、当時の状況や人々の体験をまとめた最初期の著作の一つである。上で見たように、所々で筆者の私情が吐露されており、行論も決してよく整理されているとはいえ冗長な部分も多い。だがその少々粗削りな筆致からは返って、スハルト期には長らく周知の事実にして公然の秘密だった9・30事件後の集団的暴力について、今こそ当事者の声を聞き、書き記さなければならぬという筆者の意気込みと強い使命感が感じられる。

内容的にも、『覚書』からは9・30事件後の東南スラウェシ地域の情勢を伝える情報が豊富に読

み取れた。中でも元政治囚たちの証言は、集団的暴力の加害者や被害者が実名で、かつ職位なども仔細に記録されていて具体性があり、暴力の経験談も生々しい（第7節）。私が調査に着手した2010年代中頃にはすでに他界していた人々の証言も多数含まれている点からも貴重である。当時「反共」の御旗の下でインドネシア全土で凄惨を極めた暴力が横行したことは、今日では9・30事件を探求した多くの資料が証している。また特にブトン地域においては、軍や警察は加害者だったのみならず、彼らの中にも逮捕、勾留された者がいたことはこれまでの探求からも分かってきている〔山口 2021〕。『覚書』からはさらに、たとえば元憲兵隊所属で囚人の監守をしていた Ab Al Yns が「プレマン」を装うよう命じられそのまま勾留されたように、加害者がたやすく被害者へと転じる理不尽で混沌とした状況を窺い知ることができた。

また『覚書』では、元政治囚自身が受けた暴力の体験談がしばしば自身の口から語られていた。たとえば、マワサンカ郡郡長のラ Nz、警察中尉助手 Al Syf、カレドゥパ郡郡長のラ Dng らの証言からは、PKI への偽の入党手続きや令状なき杜撰な逮捕のプロセス、勾留先での拷問など、インドネシア各地で報告されたのと同様の暴力が起こっていたことがわかる。他方で、これまでの私の聞き取りでは、逮捕勾留の経験者たちは、他の政治囚が拷問されている目撃談を語ることはあっても、自身の経験として語ることはまれで、むしろ暴力に屈しなかった自身の姿を回顧し強調して語る傾向があった〔山口 2018; 2019〕。これに対し『覚書』の証言は、人の域を越えた凄惨な暴力の実態を改めて直截的に伝えるものであった。さらには、郡長のラ Nz の証言では、彼にとって不利な偽証をしたある PKI 党員が、のちに激しく悔悟する様子も生々しく語られていた（第7節）。また前出の Ab Al Yns の証言は、1978年に南スラウェシの流刑地から解放される直前の1977年に至っても、取り調べが行われていたことなど、当時の状況をより立体的に知るための手がかりを示している。

他にも『覚書』にはこれまであまり知られていなかった情報も記載されていた。たとえば最後のスルタンの長子、ラ・オデ・マナルファの証言である（第4節）。ブトン・スルタン国では、歴代スルタンは世襲ではなく王族の3つの氏族のいずれかから貴族層によって選出された。マナルファの氏族は、20世紀初頭以降スルタンを相次いで輩出し、オランダ領東インド政府によって地方官吏に登用されるなど、植民地政府の覚えもめでたかったようだ。1960年のスルタン国廃止後も、地方政府の多くの要職を一族の出身者が占め、9・30事件後の「赤狩り」でも直接的な犠牲者をほとんど出さなかったことが分かってきている〔山口 2011: 280-281〕。こうした中で、当時東南スラウェシ地方議会議長を務め、地域の要人中の要人の一人だったマナルファが、「ブトンは PKI の拠点と見なされていた」という認識は共有していたものの、サレ・ハナンとのインタビューでは、カシム県知事の逮捕のいきさつや地域の PKI の動向、ハサヌディン軍管区のスギアント大佐がカシムに代わって県知事に就任する背景について「何もわからない」「恐ろしい」を繰り返していたことは印象的である。マナルファはすでに他界しており、真意は本人に直接確かめようがないが、地元の

社会階層と集団的暴力との関係は今後も検討を続ける必要がある¹⁸。

他方で、父親としてのカシムの横顔についての Ann 夫人の語りは（第5節）、私がこれまで夫人に聞き取りをした内容と特筆すべき相違は見られなかった。カシム夫人は、生前の夫の様子について、複数の研究者や人権擁護団体からインタビューを受けている。また私自身が複数回に亘って行った聞き取りからも、記憶や語りが相当程度定式化していることが見て取れている [山口 2021]。

このように『覚書』では当事者の豊富な証言が援用されている。これらが得られたのは、民主化とともに事件について語る時機がようやく訪れた 2000 年当時の元政治囚らを取り巻く時代状況と、聞き手としてのサレ・ハナンの力量によるものといえよう。他方で、本書は当事者の証言以外の資料的裏付けは概して乏しい。『覚書』では典拠として、①第 14 軍管区が編纂した『闘争の歴史的データと事実』（第 2 節）、②第 14 軍管区がブトンを PKI の拠点としてカテゴライズした際に依拠したとされる、Sdm 少佐率いるブトン軍小分区の「報告書」（第 3 節）、③ブトン大学生協会の Rh Md がウジュンパンダンの新聞記者とブトンの状況を調査した「報告書」（第 3 節）などが挙げられているが、原本の所在は不明である。それらの検証は今後の課題となる。

最後に、『覚書』と同時期の 2000 年に刊行された「69 年ブトン事件」に関するもう一つの文書について言及しておきたい。著者は、元公務員の Moh. ザイディで、『覚書』の中でも「南スラウエシの PKI 組織を解散させたにもかかわらず PKI への関与の嫌疑で逮捕された」人物として登場した。ザイディは、ポスト・スハルト期に他の元政治囚らとともに、ブトンの歴史や文化を発掘し紹介する文芸運動を組織し主導した一人である。1999 年創刊の文芸誌『永遠なるウォリオ (Wolio Molagi)』の第 6 号と第 7 号（それぞれ 2000 年 3 月と 5 月号刊行）に、相次いで「1969 年ブトンの悲劇のクロノロジー（以下クロノロジーと略記）」と題する、カシム県知事の逮捕劇とその社会的背景に関する記事を執筆している [Zaidi 2000a; 2000b]。「クロノロジー」では、カシム県知事による、ブトン地域開発における特に教育部門での功績や、サンボラワ港での PKI による武器の投下とその受け取りの嫌疑による逮捕と謎の獄中死、それ以降ブトン地方では南スラウエシ出身の軍人による軍政が敷かれた経緯などが記されている¹⁹。以上の事件の概略は『覚書』のそれと共通する。特にカシム県知事の PKI 入党は事実無根だったことを立証するくだりや、にもかかわらずカシムや同様の嫌疑での政治囚の勾留が続いたことなどは細部に至って酷似している（『覚書』第 5 節、「クロノロジー」5 月号 pp.33-34）。「クロノロジー」が文芸誌に掲載されたのは 2000 年 3 月と 5 月、サレ・ハナンが『覚書』を記したのは同年 6 月で、執筆時期は重なっていると見てよい。また、『覚書』も「クロノロジー」もともに、第 14 軍管区が編纂した『闘争の歴史的データと事実』を参照

¹⁸ この他には、軍がブトン社会の分裂を目論んで組織したとされる「赤い櫛団」や「11 人組」の存在や、リウ・トンキリ島での集団虐殺も、新たに得られた情報である（第 6 節）。今後他の資料との相互反照的な検討をしていきたい。

¹⁹ 「クロノロジー」の詳細については [山口 2017: 36-39] で検討した。

しており、『覚書』にザイディが登場するように、双方の筆者の間に接点があり、執筆において何らかの影響があったことが推測される。だが、2つの著作の一方が他方をモデルとして参照したのか、あるいは影響は双方向的、さらには他にいかなる資料に依拠していたのかは不詳である。だがここで、この重層化する社会的記憶についてまた別の視点から注目したいのは、『覚書』と「クロノロジー」に共通して繰り返される、「不当にもPKIの拠点の烙印を押されたブトン社会と、暴力の犠牲となったカシム県知事ら元政治囚」という、ジャカルタの9・30事件を一貫してPKIの所業に帰したスハルト期と共通し、それを複製したような見解である。さらに『覚書』の末尾でサレ・ハナンは、ブトン地域での集団的暴力をナチスの残虐行為にな重ねていた。先述のとおりスハルト期には、9・30事件は、その首謀者をPKIとする立場をより鮮明に打ち出した「G30S/PKI」と表された。さらにそれはナチスを連想させる「Gestapu (Gerakan September 30)」へと語順を置き換えられて、残虐性が一層強調された[倉沢 2002: 83, 山口 2017: 29]。ポスト・スハルト期に移行したばかりの民主化の草創期に『覚書』で描出された「69年ブトン事件」が、スハルト期の公式見解の枠組みを踏襲したものだったとしても無理からぬことかもしれない。むしろ驚くべきは、その見解が、事件後50年近くを経て私がインタビューをした2010年代に致っても、元政治囚の間で参照され、語り返され書き上げられているということである。9・30事件後のインドネシアの地方社会についての複数の絡み合った社会的記憶を解きほぐすのは容易ではない。この古くて新しい社会的記憶が、過去の束縛から解き放たれることがあるのか、そこに研究者としていかなる関わりがありうるのかは、今後も探求を続けたい。

参考資料

- Anderson, B. & McVey, T. 1971(2009) *A Preliminary Analysis of the October 1, 1965, Coup in Indonesia*. First equinox Edition. Singapore: Equinox Publishing.
- 倉沢愛子 2002 「インドネシアの9・30事件と住民虐殺」『三田学会雑誌』94(4): 81-100。
- ローサ、J.、ラティ、A. 2009「日本語版のための序章」(河合大輔訳)、ジョン・ローサ/アユ・ラティ/ヒルマン・ファリド(編)『インドネシア9・30事件と民衆の記憶』(亀山恵理子訳)明石書店、pp.15-69。
- Sale Hanan 2000 *Catatan Jurnalis operasi Militer 1969: Buton "Basis PKI"*. Program advokasi ham cabinet mahasiswa Universitas Haluoleo.
- 山口裕子 2011 『歴史語りの人類学：複数の過去を生きるインドネシア東部の小地域社会』世界思想社。
- 2017 「過去との多様な連累の探求に向けて：インドネシア地方社会の集団的暴力を巡る考察」『社会人類学年報』43: 23 - 55。
- 2018 「集団的暴力が語られる時：1960年代末以降の東南スラウェシでの経験から」『インドネシア言語と文化』24: 87-108。

重層化する社会的記憶
—9月30日事件後のインドネシア地方社会についてのある『覚書』の考察—

- 2019 「1960年代末の東南スラウェシ地方の集団的暴力：多様な経験の語りに注目して」『インドネシア言語と文化』25: 59-92。
- 2021 『9・30事件後のインドネシア地方社会：東南スラウェシ・ブトン社会の経験の語りと現在(1)』（科研費研究成果報告資料集、課題番号 25905003、16K13306）。
- Zaidi, Moh 2000a “Kronologi Tragedi Buton 1969 (1969年ブトンの悲劇のクロノロジー)” *Wolio Molagi* 6: 29-31.
- 2000b “Kronologi Tragedi Buton 1969 (Bagian II、第二部)” *Wolio Molagi* 7: 33-36.

